

【小さな日本の町は、オリンピックの準備をしているフィンランドの競歩チームに大きな驚きをもたらしました「それは当惑するほどの嬉しい驚きでした」】

世界のニュースは、これまで日本人が東京オリンピックにどのように反対しているかを伝えてきました。しかしフィンランドの競歩チームが事前キャンプのために小さな町、壮瞥町に到着したとき、そういった情報はありませんでした。

添付のビデオで壮瞥町のフィンランド人への挨拶をご覧ください。

(応援動画)



過去1年半にわたる東京オリンピック開催をめぐる議論は非常に否定的なトーンのものでした。コロナ禍、最大200億ユーロの予算超過、そして大会の不人気に関する世論調査は、日本の報道であろうと国際的な報道であろうと、その事実を大きく報道しました。

ただ、ここには例外がありました。

オリンピックの事前キャンプのために、月曜日に日本に到着したフィンランドの競歩チームが、その例外を経験しました。

2年前に暑さという要因のために東京から札幌にオリンピックの競歩会場が変更され、その後フィンランドの競歩チームのキャンプ地として選ばれたのは人口2,600人の小さな町、壮瞥町でした。

フィンランドから、オリンピック代表として Veli-Matti "Aku" Partanen (ヴェリ・マッティ“アク”パルタネン)、Aleksi Ojala (アレクシ・オジャラ)、Jarkko Kinnunen (ヤルッコ・キヌネン) が壮瞥町に滞在しています。チームリーダーはヤニ・レヘティネン監督です。

彼らは、日本の旅の初めに特別な歓迎を受けました。



（この画像は 2017 年のアーカイブ画像です。写真：Lehtikuva / Antti Aimo-Koivisto）

チームで最も経験豊富な競歩選手である 37 歳のキンヌネンは、Yle（フィンランド国営放送） スポーツ部門に電話で、ノキアの自宅から壮瞥町までの移動時間は東京での途中降機を含めて合計 27 時間かかったと語っています。

「到着したときはヘトヘトに疲れていた」とキンヌネンは言います。

疲れがあったにもかかわらず、火曜日の朝にはもう最初の練習があり、その後、チームはミニバスで壮瞥町の中心部に向かいました。

そこでフィンランド人チームは驚きました。

町長が、観客、たくさんのメディア、テレビカメラ、ジャーナリストが参加する公式レセプションを準備していたのです。それは当惑するほどの嬉しい驚きでした、レヘティネン監督は言います。



(歓迎式の様子：日本では視聴不可能)

壮瞥町でフィンランド人の競歩チームが温かく受け入れられました。

「こんな風に外国で多くの人の注目を浴びたのは初めてです。町長の挨拶だけだと思っていました。朝のランニングの後、シャワーを浴びる時間があってよかった、幸運にも」とキンヌネン氏は話し、ちょっと笑いました。



(壮瞥町の中学生によるフィンランド国歌斉唱動画)

約 20 分間続いた歓迎イベントは、そのキャリアにおいて、日本人の驚くべき振る舞いに遭遇したことのあるキンヌネンにとっても貴重な経験でした。

キンヌネンは 2007 年に大阪での世界選手権に出場したことがあります。キンヌネンとチームの他の代表アンテ

ィ・ケンパスは、練習歩行において尾行の対象になりました。

「2時間はかかる歩行中、少し離れたところから、私たちをずっと追っている一台の車があり、終わりに子どもと一緒に車から降りた若い母親が、日本語の入ったテーブルクロスを差し出してくれました」、とキンヌネンは言います。

今回壮瞥町でのフィンランドチームの練習は、安全に責任を持つ黄色いベストを着た人たちが道路に沿って見まもっていてくれます。

新鮮な日本での経験においては、14年前に比べて、より多く領ける点があります。

北海道にある壮瞥町は、ケミヤルビ市の友好都市だからです。

壮瞥町はフィンランド競歩チームを暖かく迎えました。



(ペンションおおのさんの写真) 写真提供：ヤニ・レヘティネン

フィンランドオリンピック委員会が壮瞥町に準備キャンプとして競歩チームを連れて行くことを決定してから、壮瞥町は一年間、多くのメッセージやビデオで競歩チームに寄り添ってくれました。その中ではいつもフィンランドのアスリートの幸運と成功が願われていました。

Veli-Matti Partanen、Aleksi Ojala、Jarkko Kinnunen の写真は、役場の壁に飾ってありました。



(写真提供：ヤニ・レヘティネン)

「何年にもわたって様々な経験をしてきましたが、これは本当に特別なことです。到着した当初から温かく歓迎されました。コロナ禍にあって、これは絶対に例外的なことだと思います。このようなことが見られたのはとても嬉しく素晴らしいことです。」と彼のキャリアの14回目の重要大会への準備をしているキンヌネンは言います。

「私たちは受けた歓迎に非常に満足しています。」とレヘティネン監督も同調します。